

景行天皇陵出土の須恵甕

この須恵器の甕は、昭和四十一年十月廿七日に、奈良県天理市洪谷字向山にある景行天皇陵で、葺石や埴輪列等の遺存状況を、当部陵墓調査室が調査中に出土したもので、現在当書陵部に保管している。当部でその破片を接合し、一応形態がわかるようになったので、その出土状況と器体の形状について紹介し、研究の資料に供したいと思う。

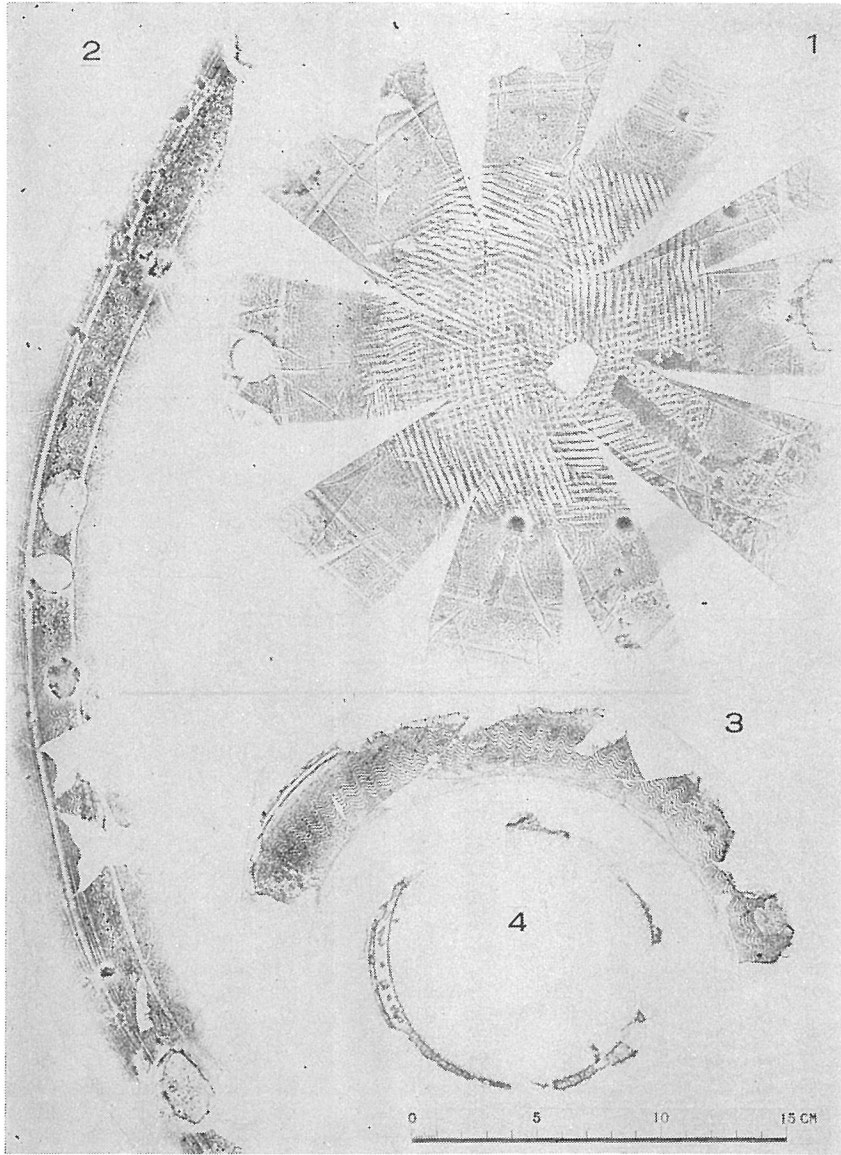
出土状況

景行天皇陵墳丘の前方部墳頂で、前縁部の中央より稍南寄のところに、約四米四方程の区域を、厚さ一〇糎程の堆積土を除去して、墳丘の地肌を露出させたところ、その前縁の肩約一米内側に、上部は破損しているが、基底部は据えられた儘の、直径約六〇糎程の一個の埴輪円筒を検出した。この埴輪円筒は、その内側の空洞部が、周囲の墳丘地肌よりも低くなつていて、そこにこの円筒上部が、押潰されて落込み、その間には流入した墳丘の黄褐色の土が詰つている。その円筒内部に落込んでいる埴輪片等を取除いて行くと、下方の円筒の内壁寄の処に、押潰され

た形で須恵甕の胴体上部が露れた(図版4)。甕の周囲には、この円筒上部の破片やこの甕の破片が黄褐色の土と共に混在し、これらを円筒内部から取除いた下には、黄褐色の墳丘の土のみがあつた。このことから、甕が置かれていた所は、埴輪円筒内部の底土の上であると認められる。従つてこの甕は、此の埴輪円筒が立てられて以後余り遠くない時期、埴輪円筒の上部が破損する以前に、此処に入れられたものと推測される。

器体の形状

この甕の破片三十一片を接合したところ、僅に欠失部分はあるが、口縁部以外は、一応形態がわかる程度に仕上げられた。現存部分は、総高二・一糎、胴部高さ九・五糎、頸部高さ二・六糎、胴直径一四・八七糎、頸基部直径八・三二糎で、素地は黒灰色をしている。器体の上半部には、黒褐色の自然釉が、殆んど全面にかかつていた様であるが、この自然釉は剥離し易くて、現在大半が剥落して、そのあとは白褐色乃至は



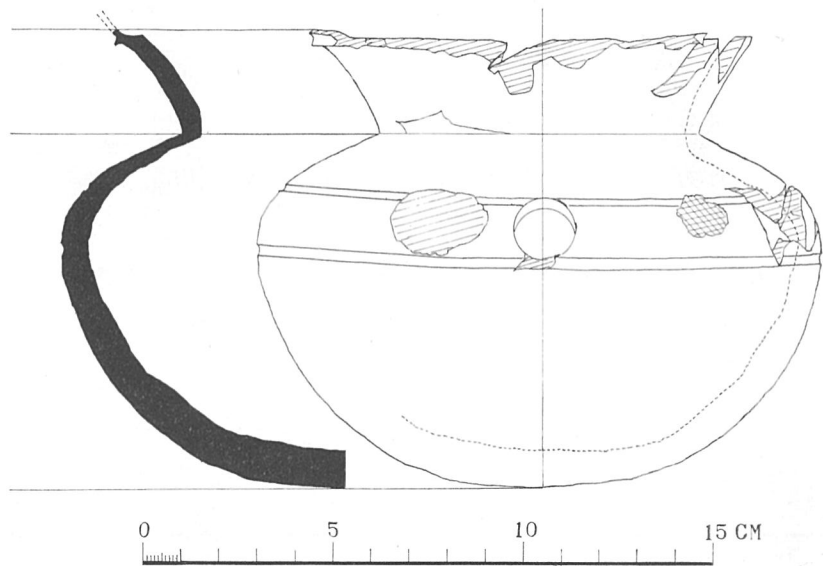
第一図 拓本 (縮尺3分の1)

- 1 底部叩文 2 胴肩部櫛描波状文
3 頸部櫛描波状文 4 頸部内側段状部

黄褐色になつている。器壁の厚みは一・二厘の部分から〇・二厘の部分まであつて、一定していない。

底部は丸底で、外面に四厘程の高さまで、叩き文(図版1・第一図1拓本)が押されている。この叩き文は、線の幅及び間隔とも約〇・一五厘の平行線で、縦と横及び斜の三方向から押印されて網目様になつている。

胴体は、張出部分の肩を中央に挟んで、横に二条、丸底の沈線を廻らす。この沈線の幅は、それぞれ平均約〇・二四厘と平均約〇・三四厘で、下方の線が太い。この二条の沈線は、一・四七厘から一・五厘の間



第二図 実測図(縮尺2分の1)

隔をおいて廻り、その間の部分に櫛描きの波状文(第一図2)を施す。この波状文は、波頭間隔約一糎、波の高低約〇・五糎、波の厚みは消えた部分があるが、七条の描線で約〇・七糎とみられる。下部の沈線の上下には、殆んど平行な淡い条痕が認められ、この部分の一部に、下方に向けて自然釉が六条垂れ下つて附着する。波状文帯の部分には、二箇所に自然釉による他の須恵器の熔着がある。

注口は、この肩部の波状文帯上部の沈線に、その上端を接して、直径一・四二糎の円孔が、器壁に直接穿孔され、頸部基線と三七度の勾配で斜上方を向く。

頸部は高さ九・五糎の位置から、垂線と三〇度から四〇度の角度で外方に立上り、高さ一一・八糎の所に、竹の節状の凸帯を着ける。この凸帯は連続して四・五糎の間に残存するほか、他に一箇所に残るのみであるが、その器壁よりの突出は、平均約〇・二糎である。凸帯より上部の立上りは、凸帯残部に立上り〇・二糎を残すだけで、他は欠失する。この部分の器壁の厚さは〇・二糎で、他の部分の器壁にくらべて特に薄い。

凸帯より下方の外側には櫛描波状文(第一図3)をつける。波頭間隔〇・八糎前後、波の高低〇・四〇・五糎、波の厚みは約一・五糎前後で、消えた部分はあるが一〇条程の描線が認められる。この部分の注口とは反対側には全面に自然釉がかかる。

凸帯の内側は幅約〇・三糎前後の水平な段を作り、その端は弧状に立

上る(第二図)。立上り部分の大半を欠失した現状では、この部分が、匙面取を施した柑の口縁部のような状態に見える。

頸部の内側は、全体に自然釉がかかっていた様で、自然釉の残存部以外は、白褐色である。

胴部内側は、頸部から黒褐色の自然釉が、一条垂れ下つて底に貯溜し、二種四方形の土塊が底に熔着している(図版3)。この自然釉貯溜部の周辺は白褐色で、ほかは灰色である。内側面には粘土の巻上げ痕と思われる凹凸と、刷毛目様の淡い横線がある。

以上紹介したように、この須恵甕は、その出土状況からは、景行天皇陵の埴輪円筒がたてられた後、この埴輪円筒の上部が破損する以前に、

この埴輪円筒の内部に入れられたと察することが出来る。

様式の上では、胴の直径に比して、頸部のつけ根の直径が大きく、頸部の立上りも短いと推測されるので、須恵器の甕としては古い様相をもつたものと考えうる。甕の実測図と比較してみると、京都穀塚の出土品⁽³⁾や、和泉五三号窯の出土品⁽¹⁾がこれと似て居り、頸部の凸帯内側に段がある点では、和泉五三号窯の出土品⁽²⁾が特に似ている。従つて森浩一氏の一期前半様式⁽¹⁾、檜崎彰一氏の東山様式⁽²⁾に相当するものとしてよいであろう。

註

- (1) 伊達宗泰・森浩一「土器」日本の考古学V(昭41)
- (2) 檜崎彰一「須恵器編年図表」日本原始美術6(昭41)
- (3) 世界陶磁全集一(昭33)

(石田 茂輔)